

沖縄県北谷町平安山原B遺跡出土の

亀ヶ岡系土器の製作地と製作者

弘前大学人文社会科学部 関根 達人

弘前大学理工学研究科 柴 正敏

遺跡から出土する土器がどこで作られたかは、文化圏や通婚圏などの集団関係、社会組織を論じるうえで根幹にかかわる重要な問題である。生産地を特定するうえで決定打となる窯跡を持たない先史土器の生産地の推定は、胎土分析が有効である。

火山列島である我が国から出土する土器には火山ガラスが豊富に含まれる。火山ガラスの化学組成は、噴出源ごとに異なるうえ、同じ火山でも噴出時期により違いがある。発表者は、焼成温度が低く火山ガラスの初生的化学組成が保持されている土器を対象に、胎土中の火山ガラスについて電子プローブマイクロアナライザーにより主成分化学組成を分析し、噴出源と噴出時期を特定、火山灰の降下範囲から土器の製作地の推定を進めてきた。

沖縄県北谷町平安山原B遺跡から大洞A1式の特徴をもつ台付浅鉢が出土した。脚部の多段化した工字文と断面カマボコ形の沈線から、型式的観点から製作地は北陸地方や中部高地の可能性が高いと考えられた。この土器には胎土中に比較的大きめな火山ガラスが多量に含まれており、分析の結果、化学組成が鬼界・アカホヤ火山灰と一致したことから、製作地は鬼界・アカホヤ火山灰が厚く堆積した西日本と推定された。平安山原B遺跡から出土した亀ヶ岡系土器は、大洞A1式の台付浅鉢をモデルとして、北陸・中部高地の出身者が西日本で製作したものが、沖縄に運ばれたと結論づけられた。

本研究はJSPS科研費 JP17K18507の助成を受けたものです。